一休という多面体
その〈像〉と語り

一休の生涯とその語り(2)
―その批判精神―

飯島 孝良

前回に引き続き、一休の歩みを追いかけていきたい。

享徳三年［一四五四］、六十一歳の一休は久方ぶりに再会した兄弟子の養叟と激烈な口論となり、遂に絶交するに到る。この頃、養叟の拠点であった陽春庵では堺の都市民を相手に講義や入室参禅が行われ、法名や法語が与えられていた。こうした「売禅」に憤った一休は、養叟とその弟子たちを痛罵する書をものした――一休はこれを『自戒集』と題した。ここで特に問題視されたのは、巷でもてはやされつつあった印可状（師が弟子をみとめたとする証書）であった。養叟が十四～十五年にわたり比丘尼や商人に仮名で注記の施された公案を教えて「得法ヲサセラレ」、田楽や座頭までもが「我ハ得法ノモノナリ」と

自慢しているさまが暴露されている。宗門内の密伝であったはずの公案禅が、都市新興層のたしなみとして手軽に消費され、その印可証明を求めて香銭が多く交わされていたのである。中には、「自分は一休和尚から印可を頂いている」などとうそぶく者さえあったという。一休は、華叟和尚にその師・言外宗忠（ごんがいそうちゅう）和尚からの印可がないというのに、自分に華叟和尚からの印可があるわけがなかろう、と喝破した。このときの一休は、養叟ほど人びとを迷わせる「大悪党ノ邪師」はいないと口をきわめて糾弾し、もはやこれまでとばかりに念仏宗や法華宗への改宗さえ宣言している。もっともこれは、実際に禅宗を捨てたというわけではなく、『自戒集』に特徴的な挑発的表現のひとつといえる。ただ、こうした言動が一休を後世にまで語り継がせるだけのインパクトとなったといえよう。

世は次第に災厄に喘ぐ一方、支配層は欲望に溺れるばかりとなっていた。長禄四年［一四六〇］八月晦日、六十七歳の一休は、「大風と洪水に人びとが憂いを深めているのに、夜は呑めや歌えの宴に酔い痴れる者どもがおり、聞くに堪えぬ」（『狂雲集』二〇三）と述べ、或いは寛正二年［一四六一］春、大飢饉を傍らに宴に酔いしれる支配層のような「遊びほうけている者どもは亡国の苦しみさえ気にもとめぬ」（『狂雲集』八二五）と弾じた。この後、京都は十年余りにわたる応仁の乱に突入し、大徳寺をはじめ多くが焼け落ちた。

文明六年［一四七四］二月二十二日、大徳寺住持就任の勅命に応じた一休は、遂に大徳

寺四十七世となって大徳寺再建に着手した。但し、これは居成であり、住持の位階のみが与えられるものであった。そのため、実際に大徳寺に居住して経営に携わるのではなく、一休は住吉に住して必要があれば上洛することとなった。

その後の一休は、次第に瘧（一種の熱病）に苦しめられるなど、衰えが目にみえるようになったものの、一休の下に参ずる者は相当の数にのぼったという。文明七年［一四七五］には、薪村（いまの京都府京田辺市）の虎丘庵に自らの墓（寿塔）を建立した。これが後に一休門下の結衆する本拠というべきものとなった。一休は引き続き住吉の床菜庵に居住し、大徳寺の復興にも熱意を傾けていった。しかし文明十三年［一四八一］十一月一日に持病の瘧が再発し、その三週間後の十一月二十一日午前六時、坐禅の格好で示寂した。八十八年の生涯であった。

一休は、主流派や世の堕落へ烈しい批判を展開する一方、自らがあるべきと考えている禅宗の在り方をしばしば強調した。己が信じる道が如何なるものか、一休は頂相（肖像画）へ寄せた自賛などの詩文で表明しているのである。本連載では、そうした表現を引き続き取り上げていきたい。

飯島 孝良（いいじま たかよし）
花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ぺりかん社）ほか。